

### 生産者の取り組み —放射能対策をしています—

茨城産直センター

茨城産直センターでは、福島第一原発事故後、早い段階で土壤中の放射性物質検査をはじめ、ゼオライトやカリ肥料といった資材を使い、作物への放射性物質の移行を抑える取り組みを行ってきました。

また、他団体との放射能に対する情報交換や、農産物の外部検査を行う中で、これまで農薬や化学肥料にできるだけ頼らず、おいしい野菜を育てるために取り組んできたことが、放射能対策に大きく貢献できるということが明らかになってきました。

#### ●土づくり

土づくりのために、生産者は畑を深く耕します。

土の中に適度な空気を入れ、さまざまな微生物がすめる環境をつくり、有機性を高めます。この「深く耕す」という技術、地表にたまった放射能を植物の根から遠ざけることにもつながり（＝植物の根が吸収できない位置に封じ込める）、放射能の吸収抑制に大きな効果があることもわかりました。

#### ●除草剤を使わない

除草剤を使わなければ、雑草が生えるため草取りが必要です。しかし、雑草の多くのイネ科の植物は、放射性物質を吸収してくることがわかりました。

このように、生産者がこれまでに取り組んできた農法や土づくりを堅持し、応用することで、<25Bq/kg（不検出）の野菜を作り上げてきたのです。

出荷前に農産物の外部検査も積極的に行い、消費者にできるだけ安心して注文してもらえよう産地としての努力を続けていきます。

#### あいコープ 1次モニタリング検査結果 (Cs 合計 <25Bq/kg)

- ・レタス 9/27 測定
- ・ミニトマト 9/27 測定
- ・きゅうり 10/10 測定



茨城産直センター生産者 白菜畑にて